



# 大建築の聖地

2012.09 / Vol.3



## 第3回 島根県庁舎(後編)

### 県庁舎の美しさ — 柱と庇の黄金比

※1 「国宝級の大建築。同感、賛成、その通り!…

(中略)…島根県庁、ほんとかっこいいですよ。お手軽な開かれた公共建築論なんかぶっ飛びますね。威風堂々、これぞ建築。」

(神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科・花田佳明教授のブログ 2002年9月15日分より引用。URL：[http://www.kobe-du.ac.jp/env/hanada/diary/log/2002\\_09.htm](http://www.kobe-du.ac.jp/env/hanada/diary/log/2002_09.htm))

ちなみに、花田先生は前職の日建設勤務時代、松江市の「プラバホール」の設計に参加された方です。

島根県庁舎は、松江城周辺の景観に配慮した控えめなデザインですが、玄人をうならせる国宝級の迫力があります。(※1)

「県庁舎のデザインなんて、柱を並べて庇をぐるっと廻しただけじゃないの?」と思われたあなた、確かにおっしゃるとおりです。……が、それ“だけ”ではないのです。

皆さんは「黄金比」をご存知でしょうか?

黄金比とは、 $1:(1+\sqrt{5})/2$ ( $\approx 1:1.618$ )の比を指します。古来、長方形は縦と横の長さが黄金比の関係になるときが最も美しいとされてきました。そのため名刺などのカード類の縦横比も黄金比になっています。

ここで県庁舎の外観を見てみましょう。柱と柱の間隔は5.6m、庇と庇の間隔は3.5mです。柱間の寸法を庇間の寸法で割ってみると…



$$5,600 \div 3,500 = 1.6 (\approx 1.618)$$

つまり、県庁舎の外観は縦横がほぼ黄金比になった長方形を単位として作られていることが分かります。

意図的に黄金比を取り入れたのか、それともたまたま黄金比に近い寸

法になっただのか、安田氏はじめ設計チームのメンバー全員が亡くなられた今となっては確かめる術もありませんが(※2)、いずれにせよ県庁舎のデザインに黄金比が潜んでいたことは、安田氏が柱と庇の構成美に心を砕いていたことの証しであり、県庁舎が国宝級に美しいと呼ばれる由縁であるように思われます。

## 庇ぐるり兄弟 — 島根県庁と外務省

インターネットサイト「大建築」では、島根県庁舎は「官庁建築のプロトタイプか究極の完成品なのか?」と評されていますが、実はこういう庇をぐるりとまわした建築のプロトタイプ(原型)は別に存在すると言われています。それが昭和35年に建設された霞ヶ関の外務省庁舎(下写真※3)です。

外務省庁舎の基本設計は、昭和27年に実施された設計コンペの結果、当時郵政省の設計課長だった小坂秀雄(※4)が受託しました。

小坂氏は外務省庁舎の設計を通じて郵政建築のプロトタイプを作ろうと考えていたフシがあり、そこで生み出された「庇ぐるり」のスタイルは、後に郵政省の標準的な設計手法として定着していきました。「庇ぐるり」は非常に合理的な手法であり、一度習得すれば誰でも比較的短い期間で設計をまとめることができたため、郵政建築全体の品質向上と、戦後の膨大な局舎建設需要への対応に大きく貢献したと言われています。(※5)

小坂氏による基本設計が完了した後、詳細設計は建設省営繕局に依頼されました。これは島根県から建設省へ庁舎の設計依頼があったのとちょうど同じ時期でした。

この頃、安田氏は島根県庁舎の設計に掛かりきりだったため、外務省庁舎の実設計には全く関係していませんでしたが(※6)、営繕局の局内誌に外務省庁舎の設計コンペに関する文章を寄稿する(※7)など、強い関心を寄せていたのは間違いありません。

そして出来上がった島根県庁舎と外務外務省庁舎は、兄弟のようになっさり「庇ぐるり」の建築になりました。詳しい経緯は不明ですが、島



photo by 7; CC-BY-SA from Wikimedia Commons



根県庁舎を超短期間で設計しなければならなかった安田氏にとって、合理的な設計手法である「庇ぐるり」はまさに“渡りに舟”と感じられたのかもしれませんが。

一見安易なようですが、そこは伝説の営繕官僚・安田臣のこと、外務省庁舎の軒先を借りただけでは終わらせませんでした。(※8)

※2 黄金比の採用について確たる証拠はありませんが、当時ル・コルビュジエが「モデュロール」と呼ばれる黄金比に基づいた寸法体系を考案し、マルセイユの「ユニテ・ダビタシオン(集合住宅)」などの傑作を生み出していました。日本が生んだ最初の世界的建築家・丹下健三(1913～2005)も、モデュロールを独自に改良した「モデュローコーディネーション」という寸法体系を用いて、代表作「香川県庁舎」(S33)を設計しています。香川県庁舎の1年後に竣工した島根県庁舎に黄金比が取り入れられたとしても全く不思議ではない時代背景があったのです。

※3 筆者がフェンス越しに外務省庁舎の写真を撮っていたところ、その姿があまりに怪しかったらしく、警察の方から職務質問を受けました。建築見学で職務質問を受けるのは建築好きの宿命みたいなものです。

※4 小坂秀雄(1912～2000)東京都出身。東京帝国大学建築学科卒。通信省営繕部設計課長、郵政省建築部長を歴任。代表作は「外務省庁舎」の他、「東京通信病院高等看護学院(S25)」「ホテルオークラ」(S37)など。

※5 外務省庁舎と郵政建築の関係については、日本郵政株式会社監修(2008)『郵政建築 通信からの軌跡』に詳しい。

※6 外務省庁舎の実設計に関わった渡部滋氏へのヒアリングより

※7 外務省庁舎のコンペでは、審査の過程はおろか結果の発表さえないまま設計者が決定されました。このような不透明なプロセスに対して安田氏は「指名競技の如くない如く」と評しました。(田中孝(2008)『物語・建設省営繕史の群像(上)』p210)

※8 「庇」だけに。

## 官公庁建築の「究極の完成品」

※9 たとえて言えば2人のピアニストが同じ課題曲で技量を競っているようなものだと思います。

※10 庇の下に梁を見せないようにするのは、簡単そうに見えて、実は通常よりもずっと施工に手間が掛かります。（上：島根県庁舎 / 下：外務省庁舎）



※11 筆者の勝手な推測ですが、安田氏は自分の方が上手く設計する自信があったからこそ、あえて同じ手法を採ったのではないかという気がします。

★参考文献  
島根県(1972)『島根県庁周辺整備誌』  
田中孝(1988)『物語・建設省営繕史の群像』日刊建設通信新社  
日本郵政株式会社監修(2008)『郵政建築 通信からの軌跡』

同じ設計手法を使っていると聞いて「島根県庁舎は外務省庁舎のパクリじゃないの?」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、たしかに、設計手法としてのオリジナリティは外務省庁舎にあります。

ただ、もともとこの設計手法は“共有”を前提に生み出されたものですから、手法を真似たことへの批判はやや的外れと言えるでしょう。むしろ、同じ設計手法にもかかわらず生じた「違い」を注意深く見比べる必要があると思います。(※9)

そういう視点で島根県庁舎と外務省庁舎の外観を見比べると、基本的な構成はよく似ていますが重要な違いが一つあります。それは、外務省庁舎は「庇の下に梁が見える」が、島根県庁舎は「庇の下に梁が見えない」ということです。(※10)

雨天の多い山陰の気候を熟知していた安田氏は、室内が暗く陰気にならないよう天井高いっぱい大きな窓をとり、庇より下に梁が出ないようにしました。光と風を遮るものがほとんどないため、県庁舎の事務室は雨の日でも明るく、風通しもとても良いのですが、このことは外観のデザインにも大きな効果を生みました。庇の下に梁を見せないことで外務省庁舎より柱と庇の交差部分がすっきりときれいに見えます。

わずかな違いではありますが、柱と庇の構成美がテーマの「庇ぐるり」だからこそ、この違いには非常に大きいものがあります。

島根県庁舎は設計手法を外務省庁舎から取り入れながらも、出来上がった建築は「パクリ」どころか本家の一步上を行くものであったと言えるでしょう。(※11) その後、小坂秀雄の率いる郵政省でも庇の下に梁を見せない設計が主流になっていったことも、それを裏書きしているように思えます。

外務省庁舎を官公庁建築の“プロトタイプ”とするならば、島根県庁舎は官公庁建築の“究極の完成品”と言っても過言ではないでしょう。

(島根県庁舎編・了)



◇次回から旧島根県立博物館(現第三分庁舎)についてご紹介します。